

---

# まほうつかいとつき

津田花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まほうつかい と つき

### 【Nコード】

N6743C

### 【作者名】

津田花

### 【あらすじ】

絵本のようなお話。ただ、その絵本はページをめくっても真っ黒な闇しか映し出されていなかった。それでも、まほうつかいは幸せだった。

この人は、いつもまっくらやみを、おさんぽしていました。

まっくろな服をきて、とんがりぼうしをあたまにのせて。

ある日、この人が歩いてみると、上からきいたことのない声がしました。

「こんばんは。」

この人はびっくりして言いました。

「こんばんは。あなたは誰ですか？」

この人は上から、しかも、とんでもなく上から声をかけられたことなどありませんでした。

すると、あの人も、少しおどろいたようすで言いました。

「私は長いあいだここにいたものです。」

あたり前のことですが、この人はそんなこと知りもしませんでした。

「初めまして。」

「じゅんぼんは。」

この人は、まっくるな空に向かって言いました。

「わたしはまほつつかいです。」

すると、空から声がふってきました。

「なるほど、まほつつかईさんでしたか。私は月と、もうします。」

つきの声は暖かい声でした。

「わたしのなまえは、まほつつかईです。わたしはまほつつかईのまほつつかईです。」

「そうですか。私はただの月です。」

二人は毎日毎日、おしゃべりをするようになりました。

まほつつかईは毎日外へおさんぽに出かけます。

なのでけんかをしても仲直りをして、二人はおしゃべりをするし

かないのです。

ある日まほうつかいは月の声が前より小さくなっていることに気がつきました。

「つきさん、どこか具合が悪いのですか？」

すると、空からふってきた声は出会った日よりも、ずっと小さな声でした。

「いいえ。」

まほうつかいは、ほっとしました。

ところが、月は小さな小さな声でもうひとつ言いました。

「ですが私はあした、消えてしまうでしょう。」

「そんな！！それは本当ですか？」

まほうつかいはくらい空を見上げました。

「はい。」

まっくらやみの中、月のあたたかい声が小さくひびきました。

やさしい風がまほうつかいを包むように走っていきました。

「どんな病気ですか？私が薬を作って来ます！」

「病気ではありません。運命です。またすぐに会えますよ。」

「分かりました。運命を変える薬を作ってきます！」

まほうつかいはあわててかけだしました。

かさかさと香る土をふみ、さらさらと鳴る麦畑を切りさき、ちくちくとふれる森の草たちをかき分けました。

家の扉に触れて、それを開き、戸棚に触れて、そこに置いてある薬を、大きななべでまぜます。

「できた！これでつきさんの運命を変えられる！！」

来た道をあわてて戻り、薬をさしだすと、月は嬉しそうに言いました。

「ありがとう。」

まほうつかいは涙をこぼしました。  
月の声があまりにも小さかったのです。

「早くこれを飲んでください。」

まほうつかいは小さな声に向かってビンをかがげました。

「それはできません。」

「なぜですか！？私はあなたが消えてしまつのはいやです！！」

「私には、かおがありません。くちもないのでのめません。」

「じゃあどうすればまた会えますか？」

「あなたが毎日、さんぼをしていれば、そのうち会えますよ。」

そうして月の声はきこえなくなってしまうました。

まほうつかいは次の日、一人でさんぼをしました。

泣いていると下から声がきこえました。

「どづしたんですか？」

「あなたは誰ですか？私はまほつつかいのまほつつかいです。」  
まほつつかいの声は震えていました。

「私はつさぎです。しろつさぎのしろです。」

「しろ？それは何ですか？」

「まっしろい事です。」

まほつつかいは、色と言う物を知りません。  
ふしぎにおもってしろにふねてみました。

「ふわふわしている。これがしろですか。」

「はい。」

しろはくすぐったそうに、やわらかく笑いました。

「どうして泣いていたんですか？」

しろの耳がびよこんと上を向きました。

「私の友達のつきが消えてしまいました。」

「月ですか。今日は新月ですね。」

「新月？それは何ですか？」

「月の名前の一つですよ。」

それからまほつつかいは、しろに月についてたくさん教えてもらいました。

月はたくさんさんの姿を持つこと。

会えない時もあること。

つきはやみを照らす明かりなのだと言ったこと。

まほつつかいは、しろといると安心することができました。

まほつつかいはふわふわのしろと一緒に、月が出るのを待ちました。

しろは1日待ちました。

まほつつかいは、ずっとずっと長い間。

「おや？」

小さな小さな声がまほつつかいの心にひびきました。

「つきさん！！」

まほつ使いは土手の上で立ち上がりました。

しろの体が月の光にすいこまれていきました。

「私のうさぎが、ごめいわくをかけました。」

「いいえ。おかげで温かい気持ちになれました。」

「またあなたに会えてよかった。」

その日、まほうつかいが夢の中で聴いたのは、スズムシとコオロギが奏でる秋の調べ。

そしてつきの優しい声でした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6743c/>

---

まほうつかいとつき

2010年10月14日23時04分発行